

代替医療におけるアロマセラピーの役割

安部 茂

帝京大学医真菌研究センター 所長

私たちは感染症との関連でアロマセラピーを研究している。アロマセラピーというと、植物精油を用いて、その香りとトリートメントといわれる皮膚への処置で、患者の健康に寄与する予防治療法、すなわち 嗅覚と触覚をという五感を介する治療というイメージが強い。しかしその成り立ちは、乾燥地帯において植物抽出物を皮膚に塗り、傷・感染などから身を守る方法が発展した経験医学であり、皮膚の処置法という側面を持つ。漢方薬と同様に、歴史の中で選択されてきた精油がその作用をもっとも発揮できるよう工夫されているのを忘れてはならない。現在、もちいられている精油は、旧約聖書に記載されているほど古い起源を持つものもあり、適切に用いれば、特別な治療上の特性を発揮するものがある。近年、自律神経系、感染病理、炎症などの制御に薬物的な作用を発揮することが証明されつつある。

精油療法の特徴は、独特な吸収経路にある。嗅覚を刺激しつつ呼吸器を介して、また、皮膚からトリートメントと呼ばれる皮膚刺激を伴いながら吸収される。しかもそれに心地よさが加わる。これらの処置は、独特な治療特性を示すだけでなく、治療者が患者と統合医療的な関係を結んでいくときの初期の過程としての意義もある。ナラティブな医療に関心をもつアロマセラピストが多数存在している状況があり、彼らの助力を得ることで補完代替医療がより患者を満足させるものになることを確信している。